

多くの経験から知識を身につける

文学部 新部真子

「昨日、福さ屋の明太子食べました！大好きなんです!!」

木吉夫さんは中央大学のOBだったのだ。

大学3年次に取材で参加した南甲倶楽部新年賀詞交歓会で思わず興奮した。偶然にも、私の好きな博多明太子の名店(株)福さ屋の社長・佐々

博多の美味しい食べ物から就職活動の相談までさせていただき、最後には「決まらなかつたら、うちの会社に来なさい」とまでおっしゃって



くれた。それだけではない。数日後、自宅にたくさんのお声を送られてきた。お声が送られてきた。

内定先の報告をしたときも、お祝いの言葉と共に明太子は送られてきた。正直、同じ大学に通っているというだけでここまでしてくれる社長に驚きを隠せない。

佐々木社長とは、今でも手紙での交流を続けさせて

いただいている。波乱な人生経験を経て会社を大きく築き上げた佐々木社長との出会いを通じ、私もやる気がおきた。『文章を書くのが好きだから』という理由で参加した『Hakumonちゅうおう』だったが、多くの取材経験を経て出会いの面白さを知った。様々なフィールドを持つている人から、話を聞くことで自分の活力になるのだ。

加えて、伊藤編集長から『良き出会いは良き出会いに繋がる』ということを教えてもらった。私も、伊藤編集長のように「紹介しますよ!」と言い合えるような出会いを大切にしたいと思っている。大学4年間を振り返ってみるとHakumonちゅうおう学生記者、キャンパスツアーコンダクター、FLP、白門祭実行委員会、南甲プロ

これからも自分に素直で正直に

法学部 武田朋実

グラムインターンシップ…。大学入学時、密かに誓った“知識を身につけるに貪欲になる”という目標を達成するため専攻の授業はもちろん、机上を飛び出し五感で得ることが出来たと自負している。この場を借りて今までお世話になった教授、大学職員さんをはじめ日々支えてくれた友人に感謝の言葉を伝えたい。

春からは日本郵政グループで働く。大学生生活で学んだことと大きく異なる分野で働こうと決めたのは、興味のあることばかりをやっているも視野は広がらないと感じたからだ。東ドイツや監視社会に興味津々な自分なんて、4年前は想像もしなかった。全く知識のないことを知ることで新たな興味が生まれる、こんなに楽しいことはない。また新たに知識をつけていく、そんな社会人もいい。

この人を突き動かすものは何か、何が原動力なのか。これは、ゼミやサークル、スポー

ツなどに打ち込む中大学生、OB・OGなどの取材をする際に、常に私が考えていたことだ。これを考えながら話を聞くと、上手くいけば、その

学生記者

ニュース



人を形成する根っこのような、本質の一部分にふれることができる。その部分にふれたときが、取材をしていておもしろいと感じる瞬間である。

もともと、いろいろな人の話を聞くことができるのでおもしろそうだと思います、2年生から学生記者を始めました。取材では、JICAという国際協力の道へ進もうとする学生や、在宅介助のボランティアを行う学生、世代を超えて学ぶシニア学生、ドキュメンタリー映画監督など、多くの人に会った。

記事からこぼれ落ち、載せられなかった言葉もたくさんある。そういった言葉が、多くの人との出会いが今の私のなかにあり、その一つ一つが確実に私に影響を与えている。

学生記者だけではなく、大学の授業・ゼミ、バイト、ボランティア、インターンシップ、その他の普段の生活のなかにも、様々な物事との出会いや人との出会いが数多くあった。そのなかで会ったある人が、人を車にたとえて言った言葉が今も記憶にある。人生は、「どこに向かって、

'10年春 最後の〈私〉

どんなエンジンで、どんな速さで、どの道を通って、どのように運転していくか」だ。

でも、どこに向かっていくのかという先のことなど、その時になってみないとわからない。だから私は大学生活で、自分が今やりたいこと、知りたいこと、気になることに正直にいた。そういった自由な時間のなかで、様々な物や人に出会い、徐々に自分のことがわかってきたように思う。

私にとって大学生活は、先の目標を定めてそれに向かって努力していくものではなく、種を見つけていく作業だった。いくつかの種を拾い集めて、それをもとにこれから社会に出て新しく始めていくための、種を

身近な人に目を向けたとき

理工学部 小室靖明

探す生活だった。種は私自身の原動力で、この4年間でいくつか見つけられた。でも、自分を刺激するものはまだたくさんあるし、知らないことも山ほどある。だから私は、これからも飽きることなく自分自身を突き動かしていくものを拾い集めていくと思う。

これからも、いやもつと今以上に、自分に正直にいたい。常に物事に敏感にいて、素直に感動し、怒り、悲しみ、喜べる人でありたい。そうすることで、私自身を支えてくれるモノ、おもしろいモノに出会える。社会に出て、出会いはさらに大きく広がる。間違いないこの4年間は、そのベースとなり、私のなかで深く根を張り私を支える、そういう大切な時間になったのだと思う。

「名刺一枚で誰にでも会える仕事」

記者の魅力を語るとき、よく言われる言葉だ。見ず知らずの人と出会う機会がある記者にはそんな特権が与えられる。自分とは縁遠

い人々の、人生の歩みを聞く。一回きりの、たった数時間の中に密度の濃い時が流れる。こんなとき、上の言葉を思い出す。経歴や肩書の裏に潜む、赤裸々な本音や、思わぬエピソード



ソードを引き出せたときは尚更だ。

インタビュウの対象となるのは、魅力的な人物である。多忙を極める中でビジネススクールに入学した当時55歳の社会人や、ニュース番組の著名な解説者、数々のピアノコンクールで最高位を受賞した学生、ピアノなど数えきれない。インタビュウには、これまでの経歴を調べから臨む。経歴や実績のファイルを通して見れば、初めから尊敬の念を抱いてしまうのも当然であろう。

しかし、これとは対照的に、私には出会って暫くしてその人の魅力に気付き、尊敬してやまない一人の人

がいる。アルバイト先の飲食店で出会ったTさんだ。慢性的な人手不足の中、パートのTさんが店長の役割を担っていた。年齢は33歳、小学生の子供をもつ一児の母でもある。

お店は朝7時から夜8時までの営業で、定休日無し。私は夕方から閉店まで、週6日働いた。働き始めて1年が過ぎた頃から、店へ行くのが面倒になってきた。大学と店だけの単純な毎日が退屈だったのだ。とはいえ、当時、私は時間帯責任者という立場であり、開店から働くTさんと入れ替わりだったため、Tさんの負担を考えると辞めたくても辞められなかった。そしてこの頃からTさんのことを考えるようになった。

Tさんは開店に備え、朝5時半、一番に出勤して来る。その後スタッフとともに500人を超える来客をこなす。仕事に

追われ、Tさんの休憩時間は30分にも満たない。夕方までの勤務時間は10時間を超える。その後、家に帰ると家事をし、食事を作るという。土日も出勤する週は、子供と接する時間はほとんどない。会えない寂しさからか、子供からお母さんと話したいという電話がお店に掛かってくるのがよくあった。そんな生活を、もう5年近く続けている。

それにもかかわらず、Tさんは笑顔を保ち、生きた誇りを大事にする。スタッフの悩みも聞いてくれる、無くてはならない存在だ。どうしてこんなハードな生活が続けられるのか、ずっと不思議に思っていた。そんな中、店の忘年会が開かれた。そこで

足を運び、目で確かめる大切さを知る

学生記者を始めたとき、編集長からこんなことを聞いた。「出会い、別れは人生そのもの。出会いの数ほど、人生は豊かになる」。この言葉が今、腑に落ちている。

法学部 吉田百合香

あつという間だった4年間。炎の塔の研究室、著作権ゼミと

FLPジャーナリズムゼミ、学生記者に海外インターンシップ。常に様々なものを掛け持

ちしていたように思う。しかし、そんな掛け持ち生活も気がつけば4年卒業を目前に控え、ひとつ、またひとつと終わっていく。統一感のない学生生活だったかも知れないし、中途半端になってしまった部分もあつ

学生記者

ニュース

た。しかし、振り返ってみればそれぞれの活動で得たものがあり、自分なりにやり切ったという充実感もある。

私が大学生活を通じて大切にしてきたことは、「今しか出来ないことを今やる」ということ。入学当時、私は将来進みたい道が決まっている訳ではなかった。しかし、だからといって何となく学生生活を過ごした



場所が私にくれた「刺激」は、私に考えるきっかけを与えてくれたし、原動力になったと思うている。

学生記者の出会った人や、多摩動物公園のガイドさんや司法試験合格者など、様々な分野で活躍する方々と出会った。また、見学会ではテレビ局や政治の表舞台である永田町を訪ねるなど、普段行けないような場所にも行くことが出来た。

くはなかったもので、興味を持ったことはまずやってみようと考えたのだ。そんな私が学生記者を始めたのは、3年生になる春。正直、3年生から始めるのは遅いかな、と躊躇する気持ちもあったが、「今やらなければ後悔する」と思い、申し込んだ。

学生記者の取材では、男子バレエ

'10年春— 最後の〈私〉

一步踏み出すか否かで変わる人生

法学部 駒田恵

そして、もうひとつ学生記者で学んだことがある。それは自分の目で確かめることがいかに大事かということ

だ。取材をすると、事前に得た情報から考えていたイメージと実際に取材相手と話した印象が全く異なることに気づいたり、意外な発見があったりする。無意識に作ってしまうイメージや噂だけで分かった気になる

のは怖いし、もったいない。実際に足を運び、自分の目で確かめ、動いてみる。これは社会に出ても大切なことではないだろうか。

春からは金融業界で働く。私にとっては全く新たな分野であるが、少しでも興味を持ったなら一步踏み出すというチャレンジ精神と出会いを大切にしながら、成長し続けていきたい。

大 学入学から1年、日々の生活から新鮮さが失せ、「大学生活、これでもいいのかなあ・・・」と不安を感じていた2年生の夏。たまたま見かけた1枚の「学生記者募集」の貼り紙が私の大学生活を大きく変えてくれました。

それからおよそ2年半の学生記者の活動を通じてたくさんの人を取材しました。人と話す機会に恵まれ、多くの出会いを経験することで充実した学生生活となりました。1時間弱の短い間にその人が経験してきた

物語を聞きだし、それを自分の言葉で読者に伝える、という一連の作業にやりがいと責任を感じました。

漫画家の赤松健さん、男子バレエボール選手の福澤達哉さんといった著名人の取材は、特に思い出深い経験です。しかし、一人ひとりの取材相手との出会いが、私にとって宝物となりました。人には人なりの波乱万丈な人生があって、それぞれが頑張って毎日を生き抜いています。「人生いろいろ」この言葉をこんなに実感できたのは、学生記者を始めてか

からです。

また学生記者としての活動で得た宝物のもうひとつに、尊敬できる仲間との出会いが挙げられます。物怖じせず取材相手に飛び込む強さをもった先輩、常にアンテナを高く張り、あらゆるジャンルの話題に精通している先輩、目的意識が高くバイタリテイに溢れた先輩。多くのこと

をこうした先輩達の姿から学びました。

同期生にも前向きで向上心の強い仲間がそろっていて、彼らと会うと自分もとても前向きな気持ちになることができました。そして優しく、ときに厳しく指導してくれた伊藤博編集長。「思い立ったらまず行動」という私の座右の銘は、常に行動す

ることの大切さを説いていた編集長の影響が大きいです。



あの時、貼り紙を見てアクションを起こさなければ、当然、学生記者になることはなかったでしょう。そう考えると不思議なものです。一步を踏み出さか否かで人生が変わってしまうケースは、案外少なくないのかもしれませんが、これからは積極的に一步を踏み出せる人間でありたいと思います。

学生記者

ニュース

ランティアなどに青春を捧げている同じ学生、実社会で活躍されている大学の先輩など、何かに向かって頑張つて

思い、成長することができた。学生記者の活動以外にも大切な出会いは多い。アルバイト、サークル

振り返れば、あの夏の漠然とした不安は杞憂に終わり、サークルに、アルバイトに、旅行に、趣味に、そして学生記者にと駆け抜けてきた大学生生活でした。やりたいことに挑戦してきた結果、たくさんのお会いを経験することができました。そして

この春から文具会社の営業職として頑張つていきます。社会に出てもっともっと多くの人と出会い、いつまでも成長し続けていきたいです。

価値観広げた人との出会い

経済学部 伊藤知広

学生生活での最大のニュースは何かと問われれば、最高の出会いだと答えたい。出会いが人を成長させるとよく言うが、それを実感する4年間だった。

いる人の話を取材で聞くと自分の小ささを思い知り、自分も頑張ろうと素直に思うことができた。

特に「Takumon ちゅうおう」の学生記者の活動では、自分にとつてとても大切な出会いを経験できた。取材活動を通じ、普通の学生生活では出会うことができないような人達に話を聞いたことは大きな財産になっている。スポーツや学業、ボランティアなどに青春を捧げている同じ学生、実社会で活躍されている大学の先輩など、何かに向かって頑張つて

2年生の時に初めて学生記者の活動に参加した時、学生記者の先輩方のバイタリティーの高さや行動力には圧倒された。そういう先輩方と共に活動することで自分も変わろうと思

い、成長することができた。学生記者の活動以外にも大切な出会いは多い。アルバイト、サークル



ゼミどれも大切な出会いの宝庫だった。所属していた英語サークルには、ヨーロッパから東南アジアまで海外からの留学生も所属しており、国境を越えた友人をつくることができた。そこでフィリピンからの留学生と友人になり、彼らを訪ねてフィリピンを旅行したりもした。こうした交流によって最高のカルチャーショックを経験することができた。

アルバイトでは2年生から3年生のときにしていた映画館でのアルバイトの経験が特に思い出に残っている。他大学の学生とも友達になれたし、また学生だけではなく、映画が好きで舞台俳優やアニメの声優をめざしている人もいて刺激になった。自分とは違う生き方をしてる人との出会いは、視野と価値観を広げてくれた。本当にいい思い出になっている。

いま振り返ってみると予想以上に成長できた4年間だった。1年生や2年生には是非とも人との出会いをたくさん経験してほしい。そのため大学生活といっても過言ではない。自分の価値観やものを見る物差しを大きくする楽しさを感じてもらいたいと思う。

春から社会人になり、新たなスタートを切る。期待と不安を比べる。と圧倒的に不安の方が大きく、自分はやっているのか心配である。しかし、そのような状態でも少しだけ期待していることは、やはり人との出会いである。こ

'10年春—— 最後の〈私〉

学生記者になりませんか

学生記者が取材・編集する大学広報誌

Hakumon

ちゅうおう

2009 冬季号 no.214

【編集】 法学部OB・ジャーナリスト 門田隆博氏講演会「裁判員裁判が問いかけのち」
【創刊】 125周年に向けて。【企画】 記念プレ企画
【シリーズ】 理工学部シンポジウム&パネル展 宇宙からみた地球、地球環境の中の水、水と生命
商学部創設100周年記念シンポジウム 商学部教育のこれからを考える
特別展 浮世絵百華 平木コレクションのすべて

「Hakumonちゅうおう」は中大学生が取材・編集する大学広報誌です。
現在、多摩と後楽園キャンパスそれぞれで1、2年生の学生記者を募集しています。

- 元新聞社論説委員のプロや先輩の学生記者に取材方法・原稿の書き方はじめ添削指導を基礎から受けることができます。将来どんなキャリアをめざすにも文章力が重要です!
- 取材を通して、さまざまな人に出会うことができます。出会いの数ほど思い出ができることでしょう。
- 記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。

申し込み・問い合わせは

中央大学広報室
『Hakumonちゅうおう』
編集担当：伊藤博まで
Phone：042-674-2048（直通）
E-mail：hiroito@tamajs.chuo-u.ac.jp

れからまた自分が変わるような新たな出会いがあるのかと思うと、前向きな気持ちになれる。

社会人になっても人との出会いを大切に、今度は自分が人にいい変化を起こせる人間になりたいと思う。